『ダニエル・デロンダ』における ユダヤ主義とフェミニズム

村　瀬　順　子

ジョージ・エリオット（George Eliot, 1819-1880）の最後の小説『ダニエル・デロンダ』（*Daniel Deronda*, 1876）は，同名の主人公がユダヤ民族の国家を建設するという壮大な目的①に向かって人生を踏み出していくプロットと，美しく魅力的な女性グウェンドレン・ハーレス（Gwendolen Harleth）がグランドコート（Grandcourt）との不幸な結婚生活という経験を潜り抜け，人間的に成長していくという二つのプロットにより構成されている。作者はデロンダをグウェンドレンの精神的指導者として位置づけることによってこの二つのプロットを結びつけようとしているが，グウェンドレンは結局デロンダと結ばれる事はなく，デロンダがユダヤ人国家建設のために東方へと旅立つことにより，二つのプロットは最終的に融合される事のないまま，別々の結末を迎える。その結果，閉塞的な世界の中に取り残されるグウェンドレンの女性としての人生と，より大きな社会的大義のために自らの人生を役立てようとするデロンダの男性としての人生は，女性と男性の生き方の違いを読者に強く印象づける事になる。作者は，『フロス河畔の水車場』（*The Mill on the Floss*, 1860）のマギー（Maggie）や『ミドルマーチ』（*Middlemarch*, 1871-2）のドロシア（Dorothea）を通して，社会に貢献できる能力や情熱を持ちながら，女性であるが故に機会に恵まれず，不毛な努力に終始せざるを得ない女性たちの苦悩を描いてきた。しかるに，この作品においては，主人公を男性にする事で社会における自己実現というテーマに一つの具体性を与える一方で，女性の生き方という点では，むしろ後退しているように思われる。

西洋社会の中で，国を持たない民族として常に周縁的存在であったユダヤ民族と，家父長制において周縁に位置づけられてきた女性たちとは，一見，

共通性を持っているように思われる。そして，それを繋ぐ存在としてデロンダという人物が想定されていることは明らかである。彼はイギリス貴族サー・ヒューゴー（Sir Hugo）の甥として育てられ，英国紳士の教育を受けて成長したものの，自分の両親を知らず，密かにサー・ヒューゴーが自分の父であり，自分の出生には恥ずべき秘密が隠されているのではないかという不安を抱える人物として登場する。自らの出自に対する疑惑は，疎外され周辺に追いやられたものという意識を彼に与え，そうした意識が彼の中に迫害された人たちや社会的弱者に対する共感を育てていった。彼がグウェンドレンやマイラ（Mirah）といった女性たちの救済者としての役割を担うことになるのも，社会の周縁に位置する者としての共感から来るものであったと言える。しかしながら，彼がユダヤ人としての自らのアイデンティティを発見し，祖父やモルデカイ（Mordecai）が守ってきたユダヤ主義を継承する者として，その家父長制の列に連なる時，彼の意識の中で，グウェンドレンや母レオノーラ（Leonora）が体現する女性の抑圧と反抗の物語は周縁へと追いやられていくように思われる。

この作品において，社会の周縁に位置づけられていたユダヤ主義は物語の中心に据えられ，一つの理想として描かれるが，その一方で，女性たちは取り残されたままである。なぜなら，ユダヤ人社会はイギリス社会以上に強力な家父長制を基盤とし，女性たちの自由は厳しく束縛されているからである。作者はそれを女性の生き方として肯定しているのだろうか。作者は，女性の自己主張や自由への要求を，未熟さと自己中心性の証として批判的に描いているが，女性の心の中に渦巻く激しい反抗心と罪悪感，憎しみと恐怖といった複雑な感情は，女性に同情的なデロンダの理解をさえ超えるものであり，彼女たちに対する周囲からの抑圧がいかに熾烈で残酷なものであるかを逆に物語っている。非人間的なグランドコートを相手に闘ううちに，自らの中にはっきりと悪の存在を認識するグウェンドレンは，その苦悩の深さゆえに読者の共感を誘う。作者は，男たちのエゴや「理想」の陰に，女性たちの抑圧と反抗という「現実」を描き，そこに男たちの意識が捉えられなかったもの，理解できなかったものをむしろ書き込むことによって，フェミニズム的視点を示していると思われる。本論では，そうした作者のフェミニズム的視点を探るために，デロンダが女性の救済者からユダヤ民族の救済者となることを選択するときに，彼が切り捨てたもの，切り捨てざるを得なかったものは何

か，それは彼のどのような意識から生じたものであるかをレオノーラとグウェンドレンの告白場面を中心に考えて行きたい。

I

作者は，デロンダを最初からユダヤ人として設定するのではなく，イギリス紳士として育った彼が，物質主義・商業主義に堕したイギリス上流社会にはない精神的豊かさをモルデカイのユダヤ主義の中に見出し，惹きつけられていくプロセスを描くことで，腐敗したイギリス社会を批判している。モルデカイは，不治の病に冒され，ぼろ服をまといながらも深い学識と精神性を持ち，自らの死を超越し，民族の思想を伝えることだけを目標に生きている。モルデカイを支えているのは，自己の存在を民族の思想を伝えていくための単なる器にすぎないと考える自己犠牲の精神である。それは西洋文化が育んできた近代的な個人主義の精神の対極に位置するものであり，それは，「神聖なる調和」（'divine Unity'）と「継承」（'transmission'）ということばで表現されている。

ユダヤ主義において継承されていくべきものが民族の精神であるとすれば，イギリス上流社会における継承は，植民地からの搾取によって蓄えられた物質的富の継承である。小説の前半における，資産家の娘キャサリン・アロウポイント（Catherine Arrowpoint）とユダヤ人の音楽家クレスマー（Klesmer）の結婚に至るエピソードは，ユダヤ主義における「継承」とは似ても似つかないイギリス的「継承」に対する批判として読むことができる。アロウポイント家の財産はキャサリンの祖父が商売で蓄えたものであるが，それを一人娘に「継承」させるためには結婚相手としてバルト氏（Mr. Bult）のような貴族に連なる政治家がふさわしく，アロウポイント家の財産とバルト氏の身分を結合させることによって，イギリス上流社会の体制内にしっかりと根を下ろすことができると両親は考えている。キャサリンは，そうした結婚が彼女の個としての存在を全く無視したものであると感じ，財産を放棄してでも自分を愛してくれるクレスマーと結婚することを決意する。親の意向に従う事が娘としての「義務」であり「慣習」であり，「国家」と「公共の善」に尽くすものであると主張する両親に対して，キャサリンは「私は自分が正しいと思わない義務や尊敬できない慣習のために自分の幸福を諦めるつもりはない」（'I will not give up the happiness of my life to

ideas that I don't believe in and customs I have no respect for.' —p. 246）②
と言い切る。ここには，女性が自らの幸福を選び取る権利と子としての義務のどちらを選択するべきかという問題に対して，一つの明快な判断が示されている。キャサリンの自己主張は正当なもの，勇気あるものとして描かれ，逆に両親が主張するイギリス社会の物質的世俗的価値観は批判され揶揄されている。さらに，キャサリンとユダヤ人クレスマーとの結婚は民族の壁をも乗り越える自由さを示している。

しかしながら，作者がユダヤ主義を一つの理想として描くとき，そうした，いわばイギリス的な自由は影をひそめる。厳格なユダヤ主義において，民族の思想は個人を犠牲にしてでも守り継承すべきものとされ，民族は個人よりも優先されるからである。ましてや，女性が民族の慣習や価値観に逆らって自己主張する自由は与えられていない。モルデカイやデロンダのように男性であれば，民族の思想を継承するという使命に人生を捧げる生き方も可能であるが，女性はそこからも排除されている。ユダヤ主義の精神を継承するのは常に男性であり，デロンダの祖父，モルデカイ，デロンダへと続くホモソーシャルな連繋の中で，女性は単に子孫を生む媒介として存在を認められているにすぎないからである。ユダヤ人社会の中で女性が生きていくためには，マイラのように自己を民族の中に埋没させて没個性的に従順に生きるか，デロンダの母レオノーラのように反抗して自滅するかのどちらかしかない。

それに対して，男性であるモルデカイとデロンダの同志愛は，精神的な結合として美化されている。モルデカイは30歳，デロンダは25歳と設定されているが，余命幾ばくもないことを予感しているモルデカイが，ユダヤの思想を引き継いでくれる人物をデロンダの中に直感的に見出す場面において，二人は「未だ告白していない恋人同士」（'two undeclared lovers' —p. 495）のように向かい合い見つめ合う。また，その精神をデロンダに授けようとするモルデカイの眼差しは「臨終の床で愛する一人息子を見つめる母親の眼差し」（'the slowly dying mother's look when her one loved son visits her bedside' —p. 495）に喩えられる。モルデカイとデロンダの関係は，ユダヤ主義のもとでの同志であるのみならず，恋人のようであり，親子のようでもある。こうしたすべてを充足する関係は，まるで女性の存在を必要としないかのように見える。

モルデカイの妹マイラを自殺の淵から救ったことをきっかけとしてユダヤ

主義に興味を持ち始めたデロンダには，愛する女性を取るか，民族の大義に生きるかといった個人の幸福と義務との葛藤は，同じユダヤ人のマイラを愛する事によって，幸せなことに免除されている。ルーブロンで賭博に熱中するグウェンドレンとそれを見つめるデロンダの出会いの場面から始まるこの物語は，二人の間に愛が芽生える可能性を読者に強く期待させながら，結局はデロンダの驚異的な自制心によって実を結ぶには至らない[③]。ユダヤ人としての自覚に目覚めたデロンダにとって民族の血が絶対的な価値をもつであろう事を考えると，ユダヤ人でないグウェンドレンとの結婚は主義に反することには違いないが，安易にマイラを選択するデロンダには，一人の愛する女性を選ぶことよりもむしろ，「同じユダヤ民族の血を引く男たち」（'men of like inheritance' —p. 745）との連帯の中に自らの居場所を見出そうとする姿勢が見えてくる。デロンダのマイラへの愛情はそれだけで独立しては存在し難く，モルデカイとの関係を補強する付随的なものでしかない。マイラは，男たちの連帯をこわさないよう，徹底的に自己を主張しないことでかろうじて受け入れられているように見える。ユダヤ民族の社会はそれほど男性中心の社会なのである。

この作品の中で，モルデカイが寄食している質屋のエズラ・コーエン（Ezra Cohen）はユダヤの女性について次のように述べている。

> 'A jewish man is bound to thank God, day by day, that he was not made a woman; but a woman has to thank God that He has made her according to His will. And we all know what He has made her—a child-bearing, tender-hearted thing is the woman of our people.'
> (p. 575)[④]
>
> （「ユダヤの男は日々，女に生れなかったことを神に感謝しなければならんが，女は，神が神の意思に従って彼女を造り給うたことを感謝しなければならん。神が女をどのようなものとされたか我々はみな知っている。子を産み，優しい心を持ったもの，それが我が民族の女というものだ。」）

このコーエンの発言は，ユダヤ人社会が，女性を単に子供を産み育てる「もの」であるとみなす，女性に対して抑圧的な男性中心の社会であること

を明確に物語っている。しかし，実はそのコーエン一家には，彼の妹をめぐる秘密があり，家族にとって大きな悲しみの種となっているらしいことが暗に示されている。そこには語られることのない女性の物語が封印されている。コーエンの女性観が必ずしも現実に即していないことは明白である。しかし，女性に従順さを期待するという点ではデロンダやモルデカイも同様の認識を共有している。デロンダは，マイラを――「信仰心に溢れ，義務という形をとるものには何事であれ服従できるように見える」（'She is full of piety and seems capable of submitting to anything when it takes the form of duty.' —p. 438）――ユダヤの模範的な女性と考えている。それに対して，マイラ自身は，例えば，デロンダがグウェンドレンと結婚するかもしれないという噂を聞いて嫉妬に心をかき乱されていた時，兄のモルデカイが彼女に自己犠牲的で理想的な母のイメージを重ね合わせていることに反発を覚える場面がある。モルデカイは，無意識のうちに彼女の自然な感情を抑圧していることに気づいていない。作者はこうした男女間の意識のずれや感情のずれを随所に描き込んでいる。厳格な家父長制の上に築かれたユダヤ民族の思想が，抑圧された女性たちの反発や不満を押さえ込むことによって成り立っていることを極端な形で例証しているのが，デロンダの母レオノーラ（Leonora）である。レオノーラについて考えて行きたい。

II

レオノーラの作品における役割は，デロンダの出生の秘密を明かし，彼が実はユダヤ人であったという事実を明らかにすることであるが，作者はそこに，男たちが守り継承するユダヤ主義の陰に埋もれた，女性の抑圧と反抗の物語を描き込んでいる。厳格な父からユダヤの女性という枠をはめられ，抑圧された経験を語るレオノーラのことばには，父権社会の中で個としての存在を認められず，常に従属的な位置に置かれてきた女性の苦しみと怒りが込められている。父親の圧制から逃れるために，従順を装い，父の望む通りにいとこのエフライム（Ephraim）と結婚したレオノーラは，父の死後，歌手として女優として自由に生きる事を選択する。彼女はさらに子どものデロンダを友人のサー・ヒューゴーに託し，イギリス紳士として育てる事で，父が望んでいた後継者の存在を抹殺する。それは父に対する徹底的な反抗であり，象徴的な意味で父を殺す行為でもあっただろう。それは，女を子孫を産む

「間に合わせの道具」（‘makeshift link’—p. 631）としてしか認めなかった父への復讐であった。しかし，父の支配はその死によって消えたわけではなく，父の死後何十年もたってから，不治の病にからだを冒され苦痛に悶え苦しむようになった時，レオノーラは，それを父に逆らった自分への懲罰と感じるようになり，父の復讐が始まったのだと感じる。

レオノーラの告白は大きな精神的，肉体的苦痛を伴った告白である。それは，改悛の表明としての告白ではないからであろう。彼女は父の横暴さに反抗したことを決して後悔していない。自分には自分の人生を選択する権利があったという信念は今も変らない。しかしながら，彼女が主張する「権利」（right）は，父親の「権利」あるいは「正義」（right）に脅かされる。そのように解釈しているのは他ならぬ彼女自身であり，彼女の苦しみは彼女自身の分裂した自我の所産に他ならない。彼女は娘として妻として母としての情愛の絆さえも犠牲にして，自由を求めて生きてきたことを後悔していないと主張する反面，そうした生き方に空しさを感じ，父の復讐を恐れている。父の怒りがからだに食い込み，彼女の肉体を責め苛むように感じるレオノーラの苦痛は，女性への抑圧が肉体的な搾取，肉体的恐怖という形をとって表れることを示している。モルデカイの病が痛みを感じさせず，彼の精神性を象徴するメタファーとして機能しているのとは対照的に，レオノーラの病は父への愛と憎しみに自我を引き裂かれた彼女の肉体的精神的拷問である。

しかしながら，そのようなレオノーラの告白をデロンダはどのように受け取ったであろうか。息子をイギリス人として育てることで，ユダヤ人として受ける社会的不利益から守ってやることが，唯一自分にできる母親としての愛情であると彼女は考えていたが，デロンダはユダヤ人であることを生得の権利としてむしろ喜んで受け止める。

> ‘Your will was strong, but my grandfather’s trust which you accepted and did not fulfil—what you call his yoke—is the expression of something stronger, with deeper, farther-spreading roots, knit into the foundations of sacredness for all men. You renounce me—you still banish me—as a son’—there was an involuntary movement of indignation in Deronda’s voice—‘But that stronger Something has determined that I shall be all the more the grandson whom also you

willed to annihilate.' (p. 663)

（「あなたの意志は強かった。でもあなたが引き受けながらも果たさなかった祖父の期待――あなたが束縛と呼ぶもの――は，強力な何かの表現なのです。それは，すべての男性にとっての神聖な基盤に編み込まれ，さらに深くさらに遠くへと広がっていく根をもつものなのです。あなたは私を拒否しています。息子として今なお遠ざけています。」と，ここでデロンダの声には思わず怒りの感情が表れた，「でもそれ故にこそ一層，そのより強い何かは私が，あなたが父親と同様に抹殺しようとした孫息子として生きることを決定したのです。」）

デロンダは，母が「束縛」と感じたものは，「すべての男性にとっての神聖な基盤に編み込まれた」「より強い何か」の表現であり，個人的な満足のために阻止しようと策を弄しても必ず勝利するその「より強い何か」は，自分の存在を抹殺しようとした母の思惑にもかかわらず，自分が祖父の後継者となることを決定したのだと解釈する。作者はここでデロンダに「すべての男性にとっての神聖な基盤」と言わせることによって，彼の論理が無意識の内に女性を排除していることを暗に示している。彼の中で 'something stronger' が大文字の 'that stronger Something' となる時，ユダヤの民族的遺産を引き継ごうとする彼の決意の高まりが読み取れる。デロンダは，母に同情を感じはするが，最終的に彼が母の告白から受け取ったメッセージは，母が伝えようとした抑圧された女性の反抗と苦悩のメッセージではなく，祖父が伝えようとしたユダヤ主義の継承という大義であった。ユダヤ人社会の中で女に生れる事は，個としての自由も意志も認められず，奴隷同様の存在に甘んずることである，という母の訴えはついにデロンダの心には届かない。母レオノーラとの会見は，デロンダの中にくすぶっていた「母親に対する少年のような憧れや不安のすべてを払拭し」('All his boyish yearnings and anxieties about his mother had vanished.' —p. 667)，彼を成長させる。逆にレオノーラはデロンダによって父の予言どおりに単に父と孫を繋ぐ道具としての位置に落とされてしまう。作者はデロンダが母をいわば踏み台として，ユダヤ民族の精神を継承する一人前の男としての仲間入りを果たす瞬間を描く一方で，民族と自己との間で引き裂かれるレオノーラの，女性であるが故の苦悩を作品の中にしっかりと描き込んでいる。

Ⅲ

デロンダは祖父やモルデカイとの男同士の絆を選択していく過程において，グウェンドレンに対しても次第に距離を置くようになる。グウェンドレンに対するデロンダの反応を考えていきたい。

グウェンドレンの物語もまた，家庭内における女性の抑圧と反抗の物語である。彼女を溺愛する母と妹たちに囲まれて，家庭という「帝国」（empire）に君臨する女王のように振舞っていた彼女は，グランドコートに内縁の妻リディア・グラッシャー（Lydia Glasher）と四人の子供のいることを知りながら，そして，彼女にグランドコートとは決して結婚しないと約束したにもかかわらず，一家の破産という事態に直面した結果，地位と財産のために彼と結婚する。自らの倫理観に反する行為により，他人を踏みつけにしたことに罪の意識を感じながらも，自らの支配力に自信を持っていたグウェンドレンは，結婚後，グラッシャー夫人に対してグランドコートにそれ相応の償いをさせる事で自分自身の罪の意識も容易に癒せるものと考えていた。しかし，夫を自分の思い通りにできると思っていたグウェンドレンの自信は，世間を知らない生娘の浅はかな考えであった事がすぐに判明する。自分がグラッシャー夫人の存在を知りつつ財産目当てに結婚したことを夫に知られることは，グウェンドレンにとっては恥辱以外の何ものでもなかったが，夫は，その彼女の弱みに付け込んで，彼女の自我をねじ伏せ，反抗心を黙らせる術を心得ている男であった。彼女は夫への嫌悪と反抗心を強めていくが，それは単に征服された者の屈辱からのみ発しているわけではない。グウェンドレンは，グランドコートのグラッシャー夫人に対する卑劣な行為を承知の上で彼と結婚することによって，彼の悪に加担したのであり，財産や地位と引き換えに良心をも売り渡してしまった以上，正面きって夫を非難する事はできないのだという意識，そして，得体の知れない非人間性の塊のような夫と一緒にいる限り，自分は決して救われないのだという意識が，彼女を絶望へと追いやっていく。プライドが高く我儘なグウェンドレンが読者の同情を誘うのは，罪の意識とその報いに対する恐れを引きずりながら，一切のプライドを棄てて虚心にデロンダに救いを求めようとする彼女に「ある種の潔癖さ」（'a certain fierceness of maidenhood' —p. 70）が感じられるからである。

グランドコートがグウェンドレンを精神的肉体的に締め付けていく様子は「雷に驚く事もなく平然として彼女を締め付け押しつぶしつづけようとする蟹か蛇のような意志」（'a will like that of a crab or a boa-constrictor which goes on pinching or crushing without alarm at thunder' —p. 423）や「責め道具の力と拷問台のような冷たさ」（'the power of thumbscrews and the cold touch of the rack' —p. 680）として，しばしば下等動物や拘束具の比喩が用いられ，ここでも女性への抑圧が肉体的搾取・肉体的暴力として表現されている。さらに，語り手はグランドコートを植民地での反乱を武力で押しつぶすことを躊躇しない冷酷な行政官に喩えている⑤。植民地を制圧するように妻を征服することに喜びを見出すグランドコートの冷酷さは，その「白い手」に象徴されている。グウェンドレンは，しばしばその「白い手」に喉を締めつけられるような恐怖を覚えるが，そこには夫に対する性的恐怖も暗に示されている。ウェンドレンの中で，グランドコートの卑劣さに対する怒りが憎悪に変り，自分が解放されて自由になるためには彼の死以外にはないと夫の死を願うようになる時，彼女は自己の内部で肥大化していく悪の存在を何よりも恐れるようになる。

グウェンドレンにとってデロンダはルーレットに興じる自分に批判的な目を向けたときから，自分よりも優れた人物，正しい人物として彼女の中で神格化されていき，彼女はデロンダに必死になって救いを求めようとするが，そうしたグウェンドレンを前にして，デロンダはたびたび自分の無力を意識させられる。作者がデロンダをグウェンドレンの救済者として位置付けているならば，このデロンダの無力感はどこから来るのであろうか。

> How could he grasp the long-growing process of this young creature's wretchedness?—how arrest and change it with a sentence? He was afraid of his own voice. The words that rushed into his mind seemed in their feebleness nothing better than despair made audible, or than that insensibility to another's hardship which applies precept to soothe pain. He felt himself holding a crowd of words imprisoned within his lips, as if the letting them escape would be a violation of awe before the mysteries of our human lot. The thought that urged itself foremost was—'Confess everything to your husband; leave

nothing concealed:'—the words carried in his mind a vision of reasons which would have needed much fuller expression for Gwendolen to apprehend them, but before he had begun to utter those brief sentences, the door opened and the husband entered. (p. 610)

（この若い女性の不幸が長い時間をかけて次第に大きくなって行くのを彼はどのように捉え，どんな簡潔なことばで，それを押し止め変えていくことができるのか。彼は声を発することが怖かった。彼の心にさっと浮かんだことばはあまりに弱々しく単に絶望をことばにしただけのもの，あるいは苦痛を和らげるために単に教訓を当てはめようとする，他人の不幸に対する鈍感さにすぎないように思われた。彼は多くのことばを口の中に閉じ込めているように感じた。あたかもそれを口にすることが人間の運命の不可解さに対する畏敬を踏みにじるかのように。真っ先に浮かんだ思いは「すべてをあなたのご主人に告白しなさい。何も包み隠さずに」ということであった。このことばの中にはその理由をグウェンドレンに理解させるためにはもっと十分な説明が必要だという思いがあったが，彼がそのわずかなことばを言い始める前にドアが開き，彼女の夫が入ってきた。）

グウェンドレンとグランドコートの体裁だけを取り繕った結婚生活の悲惨な実態や，グウェンドレンがどのような恐ろしい幻想に苦しんでいるかについて知る由もないデロンダには，グウェンドレンの心の暗闇は「運命の不可解さ」として認識するしかない。グランドコートに何もかも打ち明けなさいと言おうとしたデロンダの意図は，理屈の上では妥当であっても，それはグウェンドレンの置かれている状況に対する認識の甘さを露呈している。

ここでデロンダが直面していることは，経験の伴わないことばの無力さ，空虚さではないだろうか。経験による裏付けのない理念や思考に基づいた理性的なことばしか持たないデロンダには，グウェンドレンがグランドコートとの日々の生活の中で経験している苦悩を理解することはできないだろう。

このことはグランドコートの溺死後のグウェンドレンの告白の場面でより明白になる。告白したいと一心に願うグウェンドレンを前にして，デロンダはその告白を聞くことを恐れている。グウェンドレンにとってグランドコートの溺死の場面は，それまで自分が空想の中で繰り返し思い描いてきた夫の

死が，思いがけなく現実化したものであり，その場面を語るグウェンドレンのとぎれとぎれのことばは自己の内的世界と外界との隔てがなくなり，悪夢と現実の錯綜した世界に放り出された彼女の意識の混乱を表わしている。

> But he was gone down again, and I had the rope in my hand—no, there he was again—his face above the water—and he cried again—and I held my hand, and my heart said, "Die!"—and he sank; and I felt "It is done—I am wicked, I am lost!"—and I had the rope in my hand—I don't know what I thought—I was leaping away from myself—I would have saved him then. I was leaping from my crime, and there it was—close to me as I fell—there was the dead face—dead, dead. (p. 696)
>
> （でも彼はまた沈みました，そして，私は手にロープを握っていました—いえ，彼はまた上がってきました—水面に顔を出して—また叫びました—私は手を握り締め，私の心は「死ね！」と言いました—すると彼は沈みました，それで私は「やってしまった—私は悪い人間だ，もう終わりだ」と感じました—私は手にロープを持っていました—私は何を考えたのかわかりません—私は自分自身から逃げようとしていました—その時，私は救えるものなら彼を救っていたでしょう。私は私の罪から逃げようとしていました，すると，そこにあったのです—私が落ちた時，私のすぐそばに—あの死んだ顔が—死んだ，死んだ。）

ボートの帆の向きを変えようとして海に落ちたグランドコートが「ロープ！」と叫んだ時，心の中で夫の死を願っていたグウェンドレンはロープを手に持ったまま，身動きがとれない。心の中で「死ね！」と叫んだ時，それに呼応するようにグランドコートは再び海の中に沈む。自分が殺したと思った瞬間もなおグウェンドレンはロープを手に握ったままであった。ただ，自分の中の悪から逃れるかのようにロープではなく，自分自身を海中へと投じたのである。[6] 語り手はグランドコートの溺死の場面を直接には語らず，グウェンドレンに告白という形で語らせることによって，彼女の中の殺意が実際にグランドコートの死に関与したのかどうかを曖昧なままに残している。グウェンドレンがロープを投げるのをためらったのが，果して一瞬のことだっ

たのか，数分間のことだったのかは彼女の混乱した告白から判断することはできない。しかしながら，デロンダは次のような結論を引き出している。

> Deronda felt the burden on his spirit less heavy than the foregoing dread. The word 'guilty' had held a possibility of interpretations worse than the fact; and Gwendolen's confession, for the very reason that her conscience made her dwell on the determining power of her evil thoughts, convinced him the more that there had been throughout a counterbalancing struggle of her better will. It seemed almost certain that her murderous thought had had no outward effect—that, quite apart from it, the death was inevitable. Still, a question as to the outward effectiveness of a criminal desire dominant enough to impel even a momentary act, cannot alter our judgment of the desire; and Deronda shrank from putting that question forward in the first instance. He held it likely that Gwendolen's remorse aggravated her inward guilt, and that she gave the character of decisive action to what had been an inappreciably instantaneous glance of desire.(p. 696)
> （デロンダは，彼の精神に課せられた重荷が恐れていたほどには重くないと感じた。「罪を犯しました」ということばは事実以上に凶悪な解釈の可能性を持っていたのであり，彼女の良心が彼女の邪悪な思いが決定的な力を持ったように思わせたのである。正にそれ故に，グウェンドレンの告白は，彼女のより善い意志がその間ずっと邪悪な思いに対抗して闘っていたのだということを彼に確信させた。グウェンドレンの殺意が外的な結果をもたらさなかったこと，それとはかかわりなく，（グランドコートの）死は避けようのないものであったことはほぼ間違いないように思われた。しかしながら，邪悪な願望がほんの一瞬の行為でも惹き起こすほど支配的であったとして，それがどのような外的効果をもたらしたかという問題は，その願望そのものに対する我々の判断を変えるものではない。デロンダは初めにその問題を持ち出すことを躊躇した。グウェンドレンの後悔の念が彼女の罪の意識を増大し，認識できないほどの瞬時の願望をあたかも決定的な行為であったかのように考えてしまったのだろうと考えた。）

極めて複雑微妙な叙述がなされているが，デロンダは，グランドコートの死を願ったグウェンドレンの邪悪な願望そのものを非難されるべきこととしながらも，それは「認識できないほど瞬時の願望」にすぎず，グランドコートの死にはほとんど何の影響も与えなかったという判断を下している。そして，彼女の罪の意識や改悛の情をむしろ彼女の無実の証拠として解釈している。しかしながら，先に引用したグウェンドレンの告白を見る限り，彼女が果してデロンダの考える通り，全くの潔白かどうかはそれほど明白なことではない。デロンダがここでしていることは，一つの解釈行為であって，その底にはグウェンドレンの殺意がグランドコートの溺死をもたらしたかもしれないという可能性を認めたくない，という彼自身の願望が潜んでいるようにも思える⑦。デロンダは，語り手が「男性的」と呼ぶところの理性的な「判断力」によって，グウェンドレンの告白を秩序立て，正当な解釈を下しているように見えるが，実はグウェンドレンの中の悪からむしろ目を背けようとしている。グウェンドレンのグランドコートに対する殺意が単に想像の範囲内に止まらず，実際にナイフを引き出しに隠すという行為にまで及んでいたことに対しても，デロンダはすべて想像の世界での事柄だと信じ込もうとしている。しかし，グウェンドレンがデロンダに告白した後も，度々ヒステリーの発作に襲われるのは，デロンダの解釈に回収され得ない部分を心の中に持っているからではないだろうか。それは悪の深淵を覗いた者のみが知る恐怖なのかもしれない⑧。

女性の中に潜む悪の存在から目を背け，そこに改悛と善なる自我の発露のみを安易に読み取ろうとするデロンダの理想主義的な人間愛は，グウェンドレンにとっては救いとなったかも知れないが，その一方で，女性をか弱く善良な性としてとらえようとする男性中心のイデオロギーを潜ませていると言えるだろう。それはまた女性が置かれている現実に対するデロンダの認識の甘さから来るものでもある。デロンダがマイラのような従順な女性を妻に選び，かつ，モルデカイとの男同士の関係の中に生きる場所を見出していくのも頷ける。

この作品においてデロンダの中に潜むこうした現実認識の甘さや家父長的イデオロギーは，彼の善良さや理想主義と表裏一体のものとして，それ以上に追求されてはいない。グウェンドレンに対する彼の同情と憐れみは，人が神に代って人を助け得ると考えるエリオットの「人間宗教」の理想を立証す

るものとして意図されていることは確かであろう。しかし，考えてみれば，グウェンドレンを救ったのは，デロンダを自らの「外なる良心」として救いを求めた彼女自身の道徳的向上心であり，デロンダへの愛情ではなかったか。グウェンドレンを決して見捨てたりはしないと約束しながらも結局，見捨てざるを得ないデロンダの自己矛盾を素直に受け入れるのはグウェンドレンである。母に対する愛情を除けば，誰に対しても愛情を感じることができず，欲得づくでグランドコートと結婚したグウェンドレンは，デロンダを通して初めて人を尊敬し信頼し愛する事を知り，それによって救われたのである。つまり，デロンダが一方的にグウェンドレンを救ったのではなく，彼女自身のデロンダに対する愛情，デロンダとの別れを自分に対する罰として受け止めようとする改悛の思いが逆にデロンダを精神的な高みへと押し上げていることを見逃すことはできない。

デロンダがグウェンドレンへの別れを告げる時の「私たちは再び会う事はないでしょう。けれどもお互いの心はより近づく事ができるでしょう」（'Now we can perhaps never see each other again. But our minds may get nearer.'—p. 806）ということばは，モルデカイが臨終の床で語る「死は別れであり再会である神聖な接吻としてやってくる。私はあなたの肉体の目から消えるときあなたの魂の中で全き存在となる」（'Death is coming to me as the divine kiss which is both parting and reunion—which takes me from your bodily eyes and gives me full presence in your soul.' —p. 811）ということばと響きあうものでありながら，ここでもまたデロンダはことばの空しさ——それが安易な気休めにすぎないこと——を意識させられる。しかし，デロンダの気持ちを汲みとり，苦しみを通して得た経験によって，そのことばに意味付けをし，内実化させていくのはグウェンドレンの方である。

> . . . amid the dreary uncertainties of her spoiled life the possible remedies that lay in his mind, nay, the remedy that lay in her feeling for him, made her only hope. He seemed to her a terrible-browed angel from whom she could not think of concealing any deed so as to win an ignorant regard from him. (p. 673)

（彼女の甘やかされた生活の憂鬱な不確かさの中で，彼の心にある，否，彼に対する彼女の感情の中にある可能な救済策が彼女の唯一の希望であ

った。彼女には彼が厳しい表情をした天使のように思え，何事であれ彼に隠し事をすることによって敬意を得ようなどとは考えられなかった。）

このように語り手はグウェンドレンにとっての「救い」が，「彼に対する彼女の感情」の中にあったと述べ，さらにグウェンドレンが，心の中でデロンダを神格化し，深い信頼を寄せた事が，むしろデロンダ自身を成長させるのだとも述べている⑨。デロンダは果して，グウェンドレンとの出会いによって成長したのだろうか。

デロンダはレオノーラやグウェンドレンの告白を家父長制のイデオロギーによって読み解き，それに解釈を与える事で，彼女たちとの間に精神的距離を置き，ユダヤ人の男性としての生き方を確立していった。女性の救済者から，ユダヤ民族の救済者という，より大きな目標に向かって人生を踏み出すデロンダの生き方を「より大きな生き方」（'larger life'）として肯定する見方がこの作品を貫いているのは確かであろう。しかし，デロンダの男性としての意識は，女性が抱える抑圧と反抗という「現実」を十分に認識し得たとは言えず，彼女たちとの距離を必然的に生じざるを得ない。デロンダのそうした現実認識の甘さはまた，東方における彼の試練を予感させる。作者はデロンダを東方へと旅立たせ，イギリス社会の外の世界へと送り出すことによって，そうした問題をも作品の外へと追いやる結果となっている。東方という未知の世界へと赴くデロンダの自己実現の道は危うさを孕んでおり，その後のデロンダが数々の試練に堪えて使命を全うできるという保証はどこにもない。そういう意味でデロンダの自己実現は未だ未完成という感を拭えない。

一方，多くの読者が期待したようにグウェンドレンとデロンダを結婚させることをしなかった作者の中には，デロンダを自分との関係の中で自己中心的にしか考えることができなかったグウェンドレンのエゴイズムを罰しようとする，女性への一段と厳しい姿勢が見て取れる⑩。グウェンドレンはデロンダの 'larger life' に参加できず，取り残される。グウェンドレンの未来に具体的な展望は容易には見えてこない。恐らく，デロンダの生き方とはほど遠い，歴史の中に記録される事のないささやかな人生であるだろう。しかしながら，悪を経験することによって得られた自己と現実に対する確かな認識がグウェンドレンを甘やかされた娘から，人への思いやりや愛情を持つことのできる女性へと大きく成長させたことは間違いない。しかも，グランドコー

トの死によって少なくともグウェンドレンは再び自由の身になったのである。作者が，デロンダを陰で支えるマイラのような従属的な生き方にはない自由をグウェンドレンに与えたことの意味は大きい。

作者はこの作品の中で，腐敗したイギリス上流階級の生活と，民族の精神を守ろうとするユダヤ人社会を対照的に描き，ユダヤ主義を一つの理想として描いてはいるが，同時にそのユダヤ主義が女性たちを抑圧している現実をも見逃してはいない。作者のフェミニズム的視点は，家父長制社会における男女の権力構造の中では，ユダヤの民族国家建設という高邁な理想の陰においてすら，女たちの抑圧と反抗の物語が存在すること，そしてその怒りや憎しみが彼女たちの自我を引き裂き，心の中に闇を生み出していくという現実に向けられている。男女の意識のずれ，感じ方のずれは容易に解決することはできないが，作者は，女性がそうした苦悩を通して内面的・道徳的価値を獲得し，人間として目覚めていくことに一縷の望みを託している。世界の広さと自己の矮小さを認識する地点にようやく辿り着いたグウェンドレン[11]の更生に，作者の願いが込められていると言えるだろう[12]。

注

① ジョージ・エリオットがこの作品を書いた時，その後のナチス・ドイツによるホロコーストやイスラエル建国，現在もなお激化しつつある中東紛争などは到底，想像し得なかったであろうが，当時においてもユダヤ人問題は，ヨーロッパにおける長い反ユダヤ主義の流れの中にあって複雑な問題を抱えていた。ヘルツルを指導者として，ユダヤ人たちの間でシオニズム運動が起こるのは1890年代であり，この作品が書かれた1870年代において，ユダヤ人をパレスチナに戻そうという考え方は，ユダヤ人自身から起こった動きではなく，中東における支配を睨んだイギリスの帝国主義政策の一環であったという指摘がある。但し，この論文では政治的側面についてはあえて触れない。Cf. Susan Meyer, *Imperialism at Home: Race and Victorian Women's Fiction* (Ithaca and London, Cornell University Press, 1966), p.162.

② George Eliot, *Daniel Deronda* (1876; reprt. Penguin Books, 1995), p. 246. 作品からの引用はすべてこの版により，引用文末尾にページ数を付す。

③ Henry James, '*Daniel Deronda:* A Conversation' (Atlantic Monthly, 1876; reprinted in *George Eliot: The Critical Heritage* ed. David Carroll (London, Routledge & Kegan Paul, 1971)) において，ジェイムズは三人の人物にこの作品につ

いて議論させているが，そのうちの一人 Pulcheriaに 'He [Deronda] is not a man at all!' と言わせ，人間らしさに欠けるデロンダの人物造形を批判している。

④ この部分はユダヤ学者 David Kaufmann の批判に応えて，改訂された部分の一つであり，元の版では以下のようになっていた。'A *man* is bound to thank God, as we do every *Sabbath*, that he was not made a woman. . .' (italics mine) ペンギンの1967年版と1995年版の注によると，作者は，ユダヤ人社会の強烈な男性中心主義に対する抵抗から，初版ではあえて 'every day' を 'every Sabbath' としたらしい。最終的に指摘を受けて，'A man' を 'A jewish man' に書き改め，ユダヤ人男性特有の女性観であることを明示し，距離を置いた叙述になっている。

⑤ グランドコートは，ジャマイカの黒人奴隷が起こした暴動に対して非道なまでの報復攻撃をしたことで問題になった行政官エア（Governor Eyre）と重ねられているとされる。Cf. op. cit., Meyer, p. 165.

⑥ David Carroll は，混乱した意識の中で夫を殺したい衝動と救いたい衝動に揺れるグウェンドレンが海中に身を投じたとき，果たしてグランドコートの方へ身を投げたのか，あるいはその反対方向に身を投げたのか，という疑問を投げかけている。Cf. David Carroll, *George Eliot and the Conflict of Interpretations* (Cambridge, Cambridge University Press, 1992), p. 308.

⑦ David Carroll もまた，グウェンドレンの告白に対するデロンダの解釈は仮説に過ぎないとしているが，母レオノーラとの会見によってユダヤ民族の救世主として生まれ変わったデロンダが，救世主としての資質を最初に試され，かつ証明される場面であるとして，肯定的な見方をしている。

⑧ Susan David Bernstein は，この場面において，デロンダはグウェンドレンの殺意を過小評価することによって，それを引き起こしたグランドコートの罪をも不問に付し，結果的にグランドコートの妻に対する支配を黙認しているのだと解釈している。Cf. Susan David Bernstein, *Confessional Subjects* (Chapel Hill and London, Univ. of N. Carolina Press, 1997), p. 133.

確かに，グウェンドレンの殺意と向き合うことは，それを引き起こしたグランドコートの悪と向き合うことにつながる。デロンダの中にグランドコートを容認しようという積極的な意志はないとしても，グランドコートの死を単なる事故死と解釈することによって問題を矮小化している点は否めない。それはまた，グウェンドレンに，夫に何もかも打ち明けなさいと忠告しようとした彼の認識ともつながっている。

⑨ Those who trust us educate us. And perhaps in that ideal consecration of Gwendolen's, some education was being prepared for Deronda. (p. 485) と書かれている。

⑩ Henry James は，先にあげた 'Daniel Deronda,: A Conversation' の中で，東方へと向かうデロンダに置き去りにされるという罰をグウェンドレンに与えるた

めに，作者はわざわざユダヤ問題を作品に持ち込んだのではないかという見方を人物の一人にさせ，この小説をグウェンドレンの物語として読む読み方を示している。

⑪ The world seemed getting larger round poor Gwendolen, and she more solitary and helpless in the midst. The thought that he might come back after going to the East, sank before the bewildering vision of these wide-stretching purposes in which she felt herself reduced to a mere speck. (p. 803) と書かれている。

⑫ Elaine Showalter は *Sexual Anarchy* (London, Virago Press, 1992) の中で，ジョージ・エリオットが後続の女性作家たちに残した文学的遺産について論じている。その中で，特に『ダニエル・デロンダ』に言及し，男性のデロンダだけではなく，グウェンドレンが，女性の解放といった，グラッシャー夫人や母親などと共に関わっていけるような，より高次の生き方を見出していくという発想は，明らかにエリオットの想像を超えるものであったと指摘している。(p. 66)) しかし，それは社会の進展とともに次の世代の作家たちに課せられた課題であったと言えるだろう。

（本学教授　英文学）

＜キーワード＞　家父長制，ユダヤ民族，女性の抑圧と反抗